

同志社の創立者新島襄をどう捉えるか―森中章光、和田洋一、太田雄三、井上勝也の新島像―

井上 勝也	同志社大学名誉教授
講師紹介【いのうえ・かつや】	

新入生の皆さんへ

ご紹介いただきました井上勝也でございます。

皆さんはこの春に同志社大学に入学され、早や七カ月が経ちました。或いはそれ以前に入学された学生さんもおられるかも知れません。小・中・高校とは教育環境の大きく異なった同志社大学での生活はもう慣れたでしょうか。親元を離れて初めて一人で生活する自由さと共に孤独、不自由さを感じていませんか。皆さんは京大ではない、立命館ではない、関西学院ではない、同志社大学に入学されて青春の四年間を、そして大学院まで進学する人は六年以上を同志社で過ごすことになります。十八歳から二十四、五歳というと、人生八十年の中で人間形成、思想形成上もっとも重要な時期です。そのような時期は、自分のものの見方・考え方・生き方、人間観、世界観が形成され、家族を見る眼、社会を見る眼、地球を見る眼や異性を見る眼も培われ、恋愛も失恋も体験するかも知れません。

皆さんには在学中に世の中の仕組み、自分の属する国家がかかえている問題、地球温暖化もテロの問題も考えていただきたい。青春の四年間或いは六年間はあっという間に過ぎ去っていきますよ。人生は長い。しかし時は有限です。

さて、同志社大学は九学部からなる総合大学になりました。自分の属する学部に関じこもることなく、色んな学部の授業にも興味を示し、講演会にも出席し、野球の同立戦にも、同志社が出るラグビーの試合にも応援に行ってください。在学中に是非留学することを考えてみませんか。外国を知ることによって自分の国の見方が変わり、視野が飛躍的に大きくなりますよ。同志社大学は皆さんの人間形成・思想形成を進める上で非常にいい条件が整っていることを早く知り、それをフルに活用していただきたいと思います。

さて、それでは皆さんが学ばれる同志社大学とはどのような大学でしょうか。大学には各々個性と独自性があります。とりわけ私立大学には創立者の建学の理想があります。同志社大学は新島襄（一八四三―一九〇）という極めて個性的な生き方をした人によって、一八七五（明治八）年に創立されました。慶應の福沢諭吉、早稲田の大隈重信と並んで、新島はユニークな教育観をもっていました。彼は四十七年という当時としても短い生涯ではありましたが、自分の理想をもち、それを実現するために万難を排して、唯一筋の道を実進した人です。新島の生き方をたどることが、自分の生き方に多くのヒントを得ることになり、とりわけ青年期にある皆さんには新島の青年期の生き方が大変示唆に富んでいますので、是非卒業までに新島の伝記を複数紐解くことをおすすめしたいと思います。

四人の異なる新島像

新島が一八九〇（明治二十三）年に亡くなってこれまでの――五十年間に色んな新島伝が書かれてきましたが、そのうち四人を取り挙げ、新島の伝記を書くにあたって強調点の置き方の違いによって異なった新島像が画かれることをお話したいと思います。今から森中章光、和田洋一、太田雄三に私、井上勝也の新島像の特徴を問題にいたします。以下既に亡くなった方は敬称略で、健在の方には氏をつけて申し上げます。

最初に申します森中章光（一八九四―一九九〇）は直接新島に学んだ世代ではなく、いわゆる第二世代であります。彼は一八九四（明治二十七）年、日清戦争勃発の年に長州の萩に近い山口県阿武郡に生まれました。彼は信念と情熱と実行の人、吉田松陰の生れ育った風土を受け継いだのか、明治人の古武士的な頑固一徹さをもって、自分の信ずる道を歩みました。彼の新島との出会いは一九〇八（明治四十一）年、十四歳の時同志社普通学校に入学し、島根県津和野の出身で新島のよき弟子であった波多野培根教頭を通してであります。波多野は新島の生前一八八五（明治十八）年に同志社英学校に入学し、一八九〇（明治二十三）年に卒業した新島の直門（直接教えを受けた）であります。多情多感な少年森中は、新島を「至誠一貫の人」（『勝山餘瀝―波多野培根先生遺文集』一六七頁）と捉える波多野の言動を通して新島を理解し、新島にひかれていきました。森中少年も自分の敬愛する波多野教頭の尊敬する新島を尊敬し、関心を抱くという類型をたどっています。森中は同志社普通学校を卒業して、一九一四（大正三）年同志社大学神学部に入りますが、軍隊に入るために中退しました。彼は一九三〇（昭和五）年三十六歳の時に同志社に復学し、神学部と経済学部の聴講生になっています。森中の新島についての研究と資料の収集は一九二九（昭和四）年から始まり、以後第二次大戦中は手弁当で全国に散逸した新島の書簡を始め新島にかかわる貴重な資料を収集することに大変努力をしました。現在の『新島襄全集』全十巻のうちの三巻と四巻の新島書簡のかなりの部分は森中の収集或いは筆写したものであります。彼は九十六年の生涯のうちの三分の二を新島研究に捧げましたが、一九四二（昭和十七）年『新島襄先生書簡集』を、同年『新島襄先生年譜』と『新島襄先生の生涯』上・下を刊行しました。彼は十分な収入の道が保証されない身分でありましたが、彼にとって新島は全精力を投入するに値する程魅力的な人物であったのです。

森中は最晩年の一九九〇（平成二）年一月二十日、入院中の京大病院から外出許可を得て彼の九十六歳の誕生日を祝う会に出席し、「新島襄先生の遺言と私の人生一時危うくして偉人を想う」と題する人生最後の講演をしました。彼はその三カ月後に亡くなっています。森中が最後の講演で強調しましたことは、まず彼が生涯にわたって新島の人格に魅せられたことであります。彼は次のように語っています。「私は不思議にも新島先生というすぐれた人物の強い人格的な引きつける力からどうしても離れることが出来ない。いつの間にか月日の経つは誠に早いものでございまして、ついに私の一生涯を捧げて今日九十六歳を迎えるようになったわけです」（吉田曠二著『わが生涯の新島襄―森中章光先生日記』二七五頁）と述べ、具体的に新島の人格の特徴として謙遜さとして平民主義を挙げています。そして森中は新島の人格の中核にある謙遜や平民主義の根底には神の前に恐れ慎んで頭を下げる新島があることに説き及んでいます。森中がつくり上げた新島像は彼が魅せられ、感激し、敬愛する新島先生像でありました。

さて、神学部の本井康博教授は「新島研究の系譜と動向―『新島学』への道」という論文で、「森中章光の新島研究はあくまで新島先生の研究で、そこでは顕彰（功績などを一般に知らせ、たたえること）という要素が無視できない」（『新島襄全集』を読む）一四頁）と書かれています。森中は新島研究ではなく、新島先生の研究をして、実際に調べ、証拠だて、仮説を実証するという意味の検証というよりも、功績をたたえる方の顕彰に重点がおかれたといえましょう。森中は第三世代に多くの新島研究者を育てた功績は大きいといわねばなりません。

和田洋一の描く新島像

次に一九七四（昭和四十九）年『新島襄』という伝記を刊行して注目をあびた和田洋一（一九〇三―一九九三）の場合を申し上げます。和田は現在の『新島襄全集』全十巻がまだ一冊も刊行されていない時期に、新島の死後に刊行された新島の伝記や書簡集を用い、またしばしば社史資料室に足を運んで遺品庫にある新島直筆の史料を紐解きながら、彼独自の歴史観と人物批評眼をもって顕彰型の新島伝を批判し、検証型の新島伝を書き上げました。先程の本井教授は「検証派はむしろ新島をある程度突き放して距離を保ち、歴史的な学問的対象として捉える。そして客観的で科学的な検証を心掛け、人間味溢れる多面的な新島の実像を追求することを狙いとする」（『新島研究の系譜と動向』一八頁）と書かれていますが、和田はこのタイプに属することになります。

和田は彼の『新島襄』の「まえがき」で、次のように書いています。「父は、熱心なキリスト教徒で、帝国大学の出身ではあったが、私学同志社に招かれて教師をつとめていた。キリスト教学校のよさ、同志社教育のよさを、かたく信じていたようである」（同前一頁）と。彼はクリスチャン・ファミリーに育ち、同志社大学予科長、文学部長、大学長をつとめた父親から、いつも同志社のことを聞いていました。彼は府立一中を志願しようとしたが、父のすすめで同志社中学に入りました。しかし当時の中学校の雰囲気には少々ひややかな眼で見えていました。彼は次のように書いています。「同志社の中で『新島先生』の名前をふりまわすと、それは一種の権威をおびてきて、表だって反対することができなくなるような、そういう空気があった。私はぼおとした生徒で、べつに反抗的でもなんでもなかったが、新島襄はいったいそんなにえらい人だったのか、たいしたことはなかったのじゃないか、そんなふうな受けとりかたをしていた」（同前二頁）。

和田は同志社中学に五年近く在学しながら、「学校に対する不満があったわけではないのに、卒業前に中退を決意して、私は同志社との縁を自分で切ってしまった。それから長い間の浪人生活、旧制高校、帝国大学の過程を経て、今度はドイツ語の教師として同志社（大学）へもどってきた」（同前三頁）と書いています。

和田は一九六〇年代日本経済の高度成長期に同志社大学が学生数を大幅にふやした結果、「新島の名前すらも知らない学生の方がほとんどふえていく」ことを「親子二代同志社の教師をつとめながら、新島とは親近感のうすかった私もさすがに氣になられた」（同前五頁）。そこで「同志社の学生が一冊くらいは読んでくれるように」と願うようになり」（同前五頁）、「かりに私が新島伝を書くことすれば、いますこし人間的に近づきやすい新島像をつくりあげることになろう」（同前六頁）と申しいています。

和田は以上のような問題意識をもって新島襄伝の執筆にとりかかり、大学紛争の余波がまだ残っていた一九七四年三月に彼の『新島襄』を刊行しました。彼は一九三八（昭和十三）年治安維持法違反の疑いで検挙されたことがありましたが、彼の新島を研究する上での視点は彼自身の人格、思想を反映し、独自の解釈が見られます。例えば次のような表現があります。「新島が極秘のうちに手に入れたキリスト教出版物を人目につかないところで、生命の危険を感じながら読んでいたことはまちがいない。そのことは幕府の政策にたいする新島の不満、反抗心の強さを物語っており、禁じられたものにたいする好奇心などという言葉で説明できるものではない。新島は海外へ脱出することによって始めて国禁を犯したのではな

く、このときすでに思想の自由、信教の自由を求めてあえて国禁を犯していたのである。新島が国法にたいして従順であったとすれば、新島はキリスト教に接近することはなかったはずである」（同前六五一―六六頁）。この指摘は注目に値します。

昭和のファシズム期に国家権力に抵抗し、弾圧され、耐え抜いた和田は新島のデモクラシーについての叙述に関心を向け、新島の一八六七（慶応三）年十二月二十五日付の飯田逸之助宛の手紙の中で、彼が次のように書いている箇所に注目しています。「……如何なる窮人の子なり共、誰も自在に学校へ入る事かなひ候故、読み書きの出来ぬ者甚少し。右に付日本の農夫を考ふれば、甚気の毒千万なり。農夫も矢張り〇〇（伏字）と斉（ひとし）き人間なり。然るに日本にては農夫を愚になし、豚犬の如く取扱ひ重き租税を取上候事、実に理外（道理にはずれたこと）にして暴なる（荒っぽい）政道（おさめ方、政治）というべし」（同前五三頁）。和田は新島が敢えて伏字にしている部分に將軍という文字を入れ、農夫も將軍と同じ人間だと読んでいます。

和田が新島像を構築する上で注目しているもう一つの特徴は、新島と自由民権派との関係であります。和田が「自由民権派との接触」という見出しで一〇頁を費して詳述しているのは、彼の自由民権に対する関心の強さからでありましょう。彼は新島が自由民権運動に関心を寄せながらも、直接運動にかかわらなかったことを「保身のためということばで説明しようとするならば、それは誤りである」（同前二五〇頁）と述べています。「立派な政治、民主的な政治が行なわれるためには、政治家の一人ひとりがキリスト教の信仰をもっていなければならない」というのが新島の貫いた強固な信念であって、外遊から帰ってきた板垣退助宛の新島の手紙は、まさにそのことを端的に示している」（同前）とも述べています。和田は新島のいわんとすることを正確に捉えているといえましょう。

和田の描いた『新島襄』は森中のそれとは大いに異なります。和田の生い立ち、性格、思想、昭和ファシズム期の体験も新島の思想と行動の解釈ににじみ出ているように思います。彼の新島像にはクールな部分と暖かみのある部分が共生しています。一九七〇年代以降の新島研究には和田のように森中を乗り越えて、新しい新島像の構築を目指す研究者が登場してきたといえましょう。

真実の新島像に近づくには

三番目に挙げますのは太田雄三（一九四三～）氏の『新島襄』（ミネルヴァ書房 二〇〇五年四月刊）であります。太田氏は東大教養学部の大学院を修了した後、現在に至るまでの三十年間カナダのマクギル大学で日本史を教えています。『内村鑑三』、『クラークの一年』、『＜太平洋の橋＞としての新渡戸稲造』、『喪失からの出発―神谷美恵子のこと』などすぐれた著作を刊行してきました。今回ミネルヴァ書房の評伝シリーズの一冊として『新島襄』を刊行しました。

私は人物研究をする場合に約束事があると思っています。それはできるだけ客観的に立体的、総合的に人物の全てに可能な限り公平に光をあてる、バランス、プロポーションが重要で、何よりも人物に対する深い洞察力が必要だということです。自分の都合のいい部分だけに光をあて、それを針小棒大に描くことは人物像を歪め、真実の像を画くことができませんから、そのような方法は邪道であります。ところが太田氏の『新島襄』を読みますと、研究者である太田氏にして何故このような内容になったのかと不思議に思われるような偏見に満ちたものです。太田氏は『新島襄』を書くにあたって「策士・偽善者新島襄」といった先入観及び色眼鏡をかけて執筆したといわざるをえません。太田氏はこの本の「あとがき」で「この本はこれまで多かった新島を（私の目には）理想化しすぎているように見える見方に多少チャレンジするような意図をもって書かれている」（同三七四頁）と書いています。

新島襄をこの三十年間研究してきた私が読みますと、太田氏の『新島襄』に表現上問題あり、或いは誤りと思われる箇所が沢山ありますが、一番代表的な箇所をご紹介します。二〇五頁から二〇六頁にかけて太田氏は「新島は学校経営者であっても実践的な意味ですぐれた教師であったわけではない」と書いています。私はこれまで教育学を専攻する立場から「教育者新島襄」に関心を払ってきましたが、太田氏がこのような書き方をしますと、それは間違いだといわざるをえません。新島はアメリカから帰国後一八七五（明治八）年同志社英学校を創設して一八九〇（明治二十三）年亡くなるまでの十五年間、在学生や卒業生に多くの励ましの手紙を送り、教育空間を学校にとどめず自宅にまで広げ、書齋でひざまずき、生徒の名前を挙げながら熱心に祈る新島は実践的な意味でのすぐれた教師であったと自信をもっていることができます。次に三四二頁に自責の杖事件が出てきますが、太田氏は「新島の生まれながらの演技者という一面を示しているように思われる」と書いています。新島が生徒や教師の前で自分の手を杖で打つ演技をやったというのが太田氏の解釈です。このような解釈は太田氏が新島校長の苦悩を理解せず、彼の自責行為の背景にアンドーヴァー神学校で学んだニューイングランド神学の中心概念であるNew England conscienceがあったことをご存知ないことを示しています。まだまだ問題の箇所を挙げるのですが、太田氏が新島を策士とか偽善者という視点から捉えようとする時、真実の新島像に近づくことができるでしょうか。新島を立体的・総合的に捉えることができるでしょうか。もう少しレールで客観的に新島像を描くことの方が冷静な読者にはより説得力をもつことになるのではないかと、太田氏の研究者としての才能を評価する一人として大変残念に思います。

私の新島像

それでは最後に私、井上勝也（一九三六～）の新島像を申し上げます。私は一九五四（昭和二十九）年に同志社大学に入学し、大学院に進学、博士後期課程在学中に助手に採用されました。私が助教授時代の一九六九年、全国的に大きな大学紛争が起こり、同志社も六カ月間授業がストップしました。私は同志社大学に学び教える者として、同志社大学の学生さんに私の専門である西洋教育史を教えるにしてもしっかりした立脚点をもたねばならないと考え、同志社を創設した新島襄の生き方及び建学の思想を調べ始めました。そうしますと何と一二〇年も前に新島は私が西洋教育史でギリシャ時代から追い求めている全人的人間の形成、知・徳・体の調和のとれた自立した人間の育成を同志社英学校で実践していたことがわかってきました。私にとって大変嬉しい発見でした。また新島の四十七年間の生涯を紐解きますと、幕藩体制下でもろもろのpressure（抑圧）にも屈せず、自分が正しいと信ずる道をあらゆる抵抗を排除しながらひたすら歩もうとした生涯であったことがわかってきました。彼には大きな援軍がありました。それは信仰であります。彼は旧約聖書「ヨシュア記」の「強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない」（一章九節・口語訳）という聖句に励まされ、癒されて四面楚歌の中でも勇気を与えられて難関を突破することができました。私が新島に魅せられるようになったのは新島の教育観が私の教育観と同じであったこと、とりわけ教育者新島の学生への対し方に共感したこと、それから彼の生き方が私に多くの示唆を与えたこと、新島が同志社の創立者であったこと、これらの点が主な理由であります。

私は第二次大戦中の国民学校時代に軍国主義教育を受けました。四年生の二期以降は手探りの民主主義教育を受けました。戦後価値観が一八〇度変革した時代に少年期を過ごし、一九六九年・七〇年の大学紛争でもう一度教育観・教師観の変革をせまられた時に、私は新島に出会い、新島の生き方と教育観に解決の方途を見出したといえます。私は新島の高き志の実現に激しい情熱を燃やし、決して偉そぶらず、平民主義に徹し、弱者者、病める者を思いやり、イエスの心を心として生きるキリスト者の生き方、学生の価値可能性を信じ、個性を大切に、クラスの中で一番で悪い学生に配慮し、彼らを極みまで愛する教育者の生き方に私はひきつけられているのです。新島は一八八八（明治二十一年）年十一月、「同志社大学設立の旨意」で申しています次の文章、即ち「一国を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、実是一国を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず」（『新島襄全集』1 一四〇頁）という文章を読んで、目から鱗が落ちたように思いました。私は戦争中に滅私奉公、即ち個を否定して全体のために尽くす教育を受けました。このような教育が日本人三〇〇万人の命を奪い、朝鮮半島、中国大陸を始めアジア全土に多大の損害を与えたことに私は負い目を感じていましたので、一二〇年も前に同志社の創立者新島が今述べましたような主体的な国民を教育する重要性を強調していることを知った時、私の驚きは大変大きいものでありました。

新島像を描こうとする時、力点のおき方は人によって違います。私は人間・キリスト者・教育者に力点をおいて新島を立体的に捉える努力をして参りました。

新島に関心をもつ者は自分の新島像を描くことをおすすめします。それは始めから色眼鏡をかけることなく、新島が直接書いた史料を用い、新島に直接学んだ卒業生の思い出などを紐解きながら時間をかけて描いて下さい。新島の生き方や思想は我々に色んな驚きや発見や喜びや如何に生きるべきかのヒントを与えてくれるからです。ご清聴ありがとうございます。

二〇〇五年十一月七日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録